新約聖書 ルカによる福音書 4 章 1 節―13 節（新共同訳）

[1]さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒
れ野の中を“霊”によって引き回され、[2]四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。
その間、何も食べず、その期間が終わると空腹を覚えられた。[3]そこで、悪魔
はイエスに言った。「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどう
だ。」[4]イエスは、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」
とお答えになった。[5]更に、悪魔はイエスを高く引き上げ、一瞬のうちに世界
のすべての国々を見せた。[6]そして悪魔は言った。「この国々の一切の権力と
繁栄とを与えよう。それはわたしに任されていて、これと思う人に与えること
ができるからだ。[7]だから、もしわたしを拝むなら、みんなあなたのものにな
る。」[8]イエスはお答えになった。「『あなたの神である主を拝み、／ただ主
に仕えよ』／と書いてある。」[9]そこで、悪魔はイエスをエルサレムに連れて
行き、神殿の屋根の端に立たせて言った。「神の子なら、ここから飛び降りた
らどうだ。[10]というのは、こう書いてあるからだ。『神はあなたのために天使
たちに命じて、／あなたをしっかり守らせる。』[11]また、／『あなたの足が石
に打ち当たることのないように、／天使たちは手であなたを支える。』」[12]イ
エスは、「『あなたの神である主を試してはならない』と言われている」とお
答えになった。[13]悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「荒野の誘惑」

聖書の手引書・解説書の中には「イエスの公生涯（こうしょうがい）」という言葉がしばしば出てきます。

イエスの公生涯とは、イエスが三十歳頃、荒れ野で悪魔の誘惑に打ち勝ち、民衆の間で公（おおやけ）の活動を始め、十字架につけられるまでの三年間を指します。

本日の福音書には、イエスが、公生涯に入った直後に悪魔から三つの誘惑を受け、その誘惑に打ち勝った出来事が記されています。

悪魔から誘惑を受けたのは、イエスがただ一人で荒れ野にいた時でした。「荒れ野」（ギリシア語でエレーモス）とは「人里離れた所」とも訳せます。つまり、人がいない所です。「人がいない所」と聞いた時、受ける印象は人によって違うかもしれません。それが孤独で耐え難い場所だと感じる人もいれば、ホッと安心できる場所だと感じる人もいるのではないでしょうか。

人の気配がない人里離れた場所で、イエスはしばしば祈ります。人との繋がりのない孤独な環境は、神の言葉に集中できる場所だとも言えるでしょう。

そして、神のいるところには悪魔もいるものです。私たち人間も、孤独の中で、神の言葉を聞くこともあれば、悪魔に心の隙をつけいれられることもあるのではないでしょうか。

そして、悪魔とは何であるかを知ることによって、「神とは何か」がはっきりと分かることがあるのだと思います。

洗礼者ヨハネから洗礼を受け、聖霊に満ちてヨルダン川を後にしたイエスは、聖霊によって荒れ野を引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けました。荒れ野で四十日間、何も食べずに極度の空腹を抱えたイエスに、悪魔は「神の子なら」と呼びかけます（ルカ 4:3）。

それは、聖霊によって生まれ、神から「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と宣言された神の子なのだから、「この石にパンになるように命じ」てその力を発揮したらどうか、とのささやきです（ルカ 3:22、4:3）。

パンになるように石に命じれば、実際そうなる力をイエスが持っていることを、悪魔は認めていました。つまり神の子には、神の権威が託されていることを知っていたのです。

イエスは悪魔に「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」と答えました（ルカ 4:4）。これは旧約聖書の申命記（8:3）の言葉です。

イエスが要約した申命記の言葉は、こういうものです。「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった」（申命記 8:3）。

イスラエルの民が、荒れ野での放浪生活の苦しみを通して知らされたことは、人間はパンだけで生きるのではなく、神の言葉によって生きることでした。神は、私たちの魂を向上させ、霊的に目覚めさせるために試練を与えるときがあります。

荒れ野における悪魔の二つ目の誘惑は、この世の権力と繁栄を与えようというものでした。その交換条件は、「もしわたしを拝むなら」というものです（ルカ 4:7）。

人生には、目先の欲にとらわれて、悪魔に魂を売り渡し、悪魔を拝んでしまう、そのような罠にはまってしまう状況があるかもしれません。私たち人間にも、目先の欲によって悪魔を拝むのか、良心によって神に従うのか、その選択を迫られる時があるのだと思います。

そこでイエスは再び、旧約聖書の申命記（6:13 と 10:20）の言葉を引用して「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」と悪魔に命じました（ルカ 4:8）。イエスは単に悪魔の言葉に返答しているだけではなく、聖書の言葉をもって、悪魔に命じたのです。そこにはイエスと悪魔の対決がありました。こうしてイエスは、悪魔の二番目の誘惑にも屈することなく、正しさを保ち続けました。

悪魔は再度、イエスに挑戦します。これがこの時においての、悪魔の三番目の最後の誘惑でした。悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、エルサレム神殿の屋根の端に立たせてこう言いました。「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ」（ルカ 6:9）。

さらに悪魔は、詩編（91:11 と 91:12）の言葉を引用し、神の子であればここから飛び降りても天使たちが守ってくれるので、命を落とすことはないだろうとそそのかしました。

当時のユダヤの人々は、いつの日か自分たちを救いに来てくれるメシアが登場する場所は、このエルサレムの神殿の、誰からもよく見ることのできる屋根である、と信じていました。救い主が人々に自分の力を誇示するために、最も相応しい場所を悪魔は巧妙に選んだのです。

その際、悪魔が引用した詩編の言葉は次の通りです。「神はあなたのために天使たちに命じて、あなたをしっかり守らせる」。「あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちはあなたを支える」（ルカ 4:10–11）。

悪魔が引用したこれらの聖句（詩編 91:11 と 91:12）は、神への深い信頼をあらわす祈りの言葉です。悪魔がイエスに要求した奇蹟、すなわち神殿から飛び降りても神の子なら無傷でいられるはずだ、とは、自分の力を誇示するために神の力を悪用することであり、正しい道を踏み外させようとする誘惑でした。

そんな悪魔の誘惑に、イエスも聖書の言葉を引用して、こう答えました。「あなたの神である主を試してはならない」（ルカ 4:12。申命記 6:16 より）。

神を試す、とは何でしょうか。私たち人間にとって、「神を試す」とは、そんなにピンとこないテーマだと思います。しかし人間は、「神を試す」という意識はなくとも、「人を試そう」とすることがしばしばあるのではないでしょうか。

たとえば、愛情に飢えた子供が、親や大人の愛情を試そうとすることがあると思います。そして、相手への全幅の信頼がそこにあれば、人は人を試そうとはしないでしょう。

それと同じように、神への深い信頼があれば、神を試すことはないはずです。悪魔が巧妙に、イエスに神を試させようとしたこのことは、神とイエスの関係性を汚し、断絶させようとする試みでした。

「天使のような悪魔のような」という表現もあるように、悪魔というのは、一見、魅力をまとって人を誘惑するものなのだと思います。

その誘惑の根本にあるものは、神と人とを断絶させようとする思惑です。

人間の心の中にも、悪魔と天使の両方が内在しているのだと思います。

人間には、自分の置かれている状況などによって、人を躓かせたい、人を不幸にしてやりたいという黒い思いが湧き上がってくることもあるかもしれません。

そしてまた一方では、人間は、人を助けたい、人を幸せにしたいという、内なる天使のような思いをもっている存在です。

私たちは、人生において、救いが見えず、何も信じられず自暴自棄になることもあるかもしれません。

ですが、私たちはどんな時も神の方向を見続け、神への全幅の信頼のもとに日々を歩んで行きましょう。

主イエス・キリストは、いつもあなたと共にいます。

お祈りをいたします。
天の神様。３月に入り、最近、春の訪れを感じるようになってきました。この時期、人生の転換点を迎えている人に、最善の道をお与えください。試みの中にあって聞こえてくるあなたの声に信頼し、日々を歩んで行くことができますように。救い主、イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第１朗読と第２朗読）です。

旧約聖書 申命記 26 章 1 節―11 節（新共同訳）

[1]あなたの神、主が嗣業の土地として得させるために与えられる土地にあなたが入り、そこに住むときには、[2]あなたの神、主が与えられる土地から取れるあらゆる地の実りの初物を取って籠に入れ、あなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所に行きなさい。[3]あなたは、そのとき任に就いている祭司のもとに行き、「今日、わたしはあなたの神、主の御前に報告いたします。わたしは、主がわたしたちに与えると先祖たちに誓われた土地に入りました」と言いなさい。[4]祭司はあなたの手から籠を受け取って、あなたの神、主の祭壇の前に供える。
[5]あなたはあなたの神、主の前で次のように告白しなさい。「わたしの先祖は、滅びゆく一アラム人であり、わずかな人を伴ってエジプトに下り、そこに寄留しました。しかしそこで、強くて数の多い、大いなる国民になりました。[6]エジプト人はこのわたしたちを虐げ、苦しめ、重労働を課しました。[7]わたしたちが先祖の神、主に助けを求めると、主はわたしたちの声を聞き、わたしたちの受けた苦しみと労苦と虐げを御覧になり、[8]力ある御手と御腕を伸ばし、大いなる恐るべきこととしるしと奇跡をもってわたしたちをエジプトから導き出し、[9]この所に導き入れて乳と蜜の流れるこの土地を与えられました。[10]わたしは、主が与えられた地の実りの初物を、今、ここに持って参りました。」
あなたはそれから、あなたの神、主の前にそれを供え、あなたの神、主の前にひれ伏し、[11]あなたの神、主があなたとあなたの家族に与えられたすべての賜物を、レビ人およびあなたの中に住んでいる寄留者と共に喜び祝いなさい。

新約聖書 ローマの信徒への手紙 10 章 8 節 b―13 節（新共同訳）

[8b]「御言葉はあなたの近くにあり、／あなたの口、あなたの心にある。」これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです。[9]口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。[10]実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。[11]聖書にも、「主を信じる者は、だれも失望することがない」と書いてあります。[12]ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。[13]「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。

教会讃美歌　357 番「主なる神を たたえまつれ」、375 番「神の息よ」、337 番「やすかれ わがこころよ」。